

学生の芸術音楽鑑賞の魅力に関する調査・研究（1）

Research on the Charm of Students' Art Music Appreciation（1）

（2014年3月31日受理）

太田正清

Masakiyo Ohta

Key words : 芸術音楽鑑賞, 芸術音楽鑑賞の魅力, 指揮者の魅力

要 旨

日本では、音楽鑑賞を始める時期は中学校の音楽の時間からが大半であろう。そこで行われている音楽鑑賞は例えば、交響曲の場合、第1楽章の第1主題は…で、第2主題は……だというやり方が多い。果たしてそれだけでよいのだろうか。

鑑賞とは、芸術作品を感受し、味わい理解することである。創作における能動的な美意識に対して受動的な美意識とされるが、作品に自己を同化し、その形成過程を体験し、追想像することであり、その意味で一種の創造的行為ともいえる。つまり、単に主観的享受に留まらず、創作者の能動的な美意識を自分のものとして体験する、即ち、創作者の生をみずから生きることであり、それ故芸術作品の鑑賞とは単なる嗜好ではなく鑑賞者の精神生活を深める糧となり得るのである。

本研究では、平成25年度に子ども学科に入学した学生達が、朝比奈隆指揮／大阪フィルハーモニー交響楽団演奏の交響曲第5番 ハ短調「運命」作品67ベートーヴェン作曲をどのように鑑賞したかを2、3で、また、マーカス・ポシュナー指揮／広島交響楽団演奏の同交響曲を比較聴取鑑賞したものを4で、学生達の記述から考察したものである。

1. 鑑 賞 と は

鑑賞とは改訂標準音楽辞典（KK音楽之友社）¹⁾によれば、appreciation〔英〕Genuss〔独〕appreciation〔仏〕apprezzamento〔伊〕芸術作品を感受し、味わい理解すること。創作における能動的な美意識に対して受動的な美意識とされるが、作品に自己を同化し、その形成過程を体験し、追想像することであり、その意味で一種の創造的行為ともいえる。つまり、単に主観的享受にとどまらず、創作者の能動的な美意識を自分のものとして体験する、すなわち創作者の生をみずから生きることであり、それゆえ芸術作品の鑑賞とは単なる嗜好ではなく鑑賞者の精神生活を深める糧となり得るのである。

鑑賞には、静観的鑑賞と感情的鑑賞の両面があり、心

に豊かなイメージを喚起させるには感情的側面が必要であることは言をまたないが、一方で形成された構造を知理的、客観的に分析し、再構築するためには、作品と自己との間にある一定の距離を保ち静観することが必要となる。音楽のように実在的形象をもたず感覚に直接に訴える芸術では、鑑賞はいきおい感情的、耽溺的になり、作品の表面にあらわれる音響の美しさや優れた技巧にとられやすいが、その音楽に普遍的な価値を与えている精神的な美を感受することが大切である。

また、音楽大事典第2巻（平凡社）²⁾によれば鑑賞とはappreciation〔英〕美的享受ästhetischer Genuss〔独〕という用語もしばしば鑑賞とほとんど同義に使われるが、「享受」の語には受容面が強く伴うのに対し、鑑賞には価値評価が含まれる。鑑賞における評価や批判の要

素を強調すれば、鑑賞は批評につながっていく。

対象を知覚しただけでは鑑賞にはならず、感性以外の働きの参加が必要であるが、それによって感性的知覚自身も生き生きとし、そこには見るとか聴くとかいう知覚自体の機能的な喜びがみられる。鑑賞には見たいままに見、聴きたいままに聴くという態度の自由さがあり、自己の生命をのびのびと開放する楽しさがある。鑑賞に享楽の面があることは争われない。

しかし鑑賞は単に主観的な行為なのではなく、ある種の客観性が含まれている。自己自身を鑑賞するのではなくて、対象を鑑賞するのだからである。ヴァッケンローダー Wilhelm Heinrich Wackenroder (1773 ~ 98) も音楽を例にとって、自己陶酔的鑑賞を退け、音の流れを注意深く追う客観的な態度を真の享受とした。ガイガー Moritz Geiger (1880 ~ 1937) は鑑賞のこの2つの型に、内方集中Innenkonzentrationと外方集中Aussenkonzentrationという名前を与え、芸術鑑賞は外方集中でなければならないと説いた。しかしまた、鑑賞は対象にのみ依存するものではなく、むしろ鑑賞者の働きの方が重要である。管長者は、その力(いわゆる鑑賞眼)に応じた程度しか鑑賞できない。

鑑賞者は対象に共感し、対象を味わうのであるが、実は単なる自己享受とは違う意味で、対象に投入され、そこに移しおかれた自分を味わっているにすぎないのである。美や芸術における自己の投入は、感情を中心として行われる。感情移入作用こそ美や芸術を成り立たせる原理でなければならない。およそそのような考え方をとって、美や芸術の受容の面を説明しようとしたのが感情移入説empathy〔英〕, Einfühlungstheorie〔独〕であり、それを徹底して説いたのはリップスであった。彼のいう感情移入は他我認識の原理でもあり、美的な場合に限らないが、「美的感情移入」が最も純粹で完全であるとしており、この概念は彼の美学の基本となっている。感情移入は要するに、対象がもつ感情表出の可能性を説明するために仮定された作用にすぎない。対象は感情を移入されることによって内容をもつに至る、とする。対象を美的に知覚する場合に、われわれは対象が感情内容をもっているものとして直接体験するが、この事実を「自我感情の客観化」というプロセスによって説明した。もつとも、この場合の感情はきわめて広い意味で生命的活動

を包括している。

感情移入説は心理的美学隆盛期の中心概念であり、20世紀の初めにいろいろ変容を生み出しながら広まっていった。しかし、この学説は美的対象における形式と内容の融合を感情作用の側からうまく説明してはいるが、美意識全体の説明としてはなお不十分さを免れない。感情移入作用以上の本源的な作用がその後反省されたし、またこの説によっては、芸術作品に現れた作者の把握の仕方を理解することはできないとされた。芸術鑑賞では作者の意図に沿って自己を対象において拡充する面があるからである。その点、鑑賞には創造的などころがあり、いわば追想像であるともいえる。表面的には制作とは反対方向のものとして対立するが、根底においてはほとんど1つのものといえよう。鑑賞なくして制作は進作者の創造性は鑑賞されえないのである。さらに美的な鑑賞は、対象に置いて新しい意味を発見するような積極的な働きであるが、それには感情面ばかりでなく直感面の参加が必要であることも忘れてはならない。

鑑賞に伴うものとして、多少ともカタルシスの効果があることも見のがせない。カタルシスkatharsis〔ギリシャ〕とはアリストテレスが悲劇の効果の定義に用いた用語であるが、彼自身、概念内容を説明しなかったため、古来議論が多い。だが、一般には、悲劇を見ることにより、恐れとあわれみの有害感情が心理的に排除され浄化されることと理解されている。鑑賞が自発的、自己目的的な楽しみであるかぎり、晴れ晴れとすることは当然であろう。拡大解釈すれば、鑑賞にはカタルシスが伴うといえよう。

ところで、芸術はそれぞれ異なる様式をもち、さらにそれぞれの個性を有する。芸術鑑賞は作品の様式や個性に即応したものでなければならない。激しい様式の転換がある場合には、以前の鑑賞態度では当然間に合わないことになろう。鑑賞と創造は対応するものであり、この2つは根底として1つでなければならない。即ち真の鑑賞とは、鑑賞者の中に対象に即して自由な創造的働きがわきたつことともいえよう。

音楽鑑賞の特質はすべて「聴く」ことに由来するといえる。いかに聴くかは鑑賞者の自由に委ねられているようでありながら、先述のように様式的鑑賞が望ましい芸術鑑賞であるとすれば、バロックにはバロックの、現代

には現代にふさわしい聴き方があることになろう。

2. 交響曲第5番 ハ短調「運命」作品67 ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン冒頭の8分休符

平成25年度に子ども学科に入学した学生がこの交響曲をどのように鑑賞したかについて学生の記述から考察していきたい。

交響曲第5番ハ短調「運命」作品67ベートーヴェン作曲（朝比奈隆指揮／大阪フィルハーモニー交響楽団）³⁾の第1楽章の冒頭部分に8分休符が入れている効用について、筆者が学生に説明した後、この楽曲をDVDにより鑑賞した女子学生1は次のように記述した。

私は、「運命」はとてもクラシックの中でも好きです。♩ ♩ ♩ | ♩のところはあまり考えたことがありませんでしたが、先生に♩ ♩ ♩ | ♩との違いを説明されて、そこに耳を傾けて聴いてみると、確かにこの曲は工夫されているから印象がとても強いものになっていったんだなと思いました。8分休符からの8分音符に一音一音とても重いものが込められているような気がしました。指揮者を見ていても分かるように拍のとりかたが難かしそうだった。

女子学生2は冒頭部分について次のように記述した。

曲の出だしで確かに半拍置いていることが分かった。その後で曲の雰囲気明るくなったが、すぐに冒頭部分のあの追い詰められているかのような緊張感に再び変わっていった。明るい部分でもあの有名な「ンダダダダーン」を演奏しており、雰囲気は違えども緊張感があり、曲を楽しむことができた。

男子学生1は冒頭部分について次のように記述した。

この曲はよくいろんなところで聴いたことがありましたが、こうして演奏を観るのは初めてでした。指揮者がとてもいろんな動きをしていて、私には何をしているのか分からないが、他の人には分かっているのでしょうか。先生の言った通り、頭に休み（8分休符）が入れてあり、そのことで迫力が出ている。

男子学生2は、先生の言われた冒頭の衝撃的なリズム（8分休符を入れている）もなるほど感じました。

女子学生3は「運命」の第1楽章の冒頭のリズムは♩ ♩ ♩ | ♩ではなく♩ ♩ ♩ | ♩というのを初めて知り

ました。だから運命は迫力があるのだと分かりました。8分休符を入れたことは驚異的ことだと思いました。

女子学生4は第1楽章の冒頭のリズムは♩ ♩ ♩ | ♩の（8分休符）に注目して聴いてみましたが、本当に（8分休符）を入れることで驚異的の迫力となるのだと思いました。

女子学生5は、冒頭部分について次のように記述した。授業の初めに先生がおっしゃった3連符の前の8分休符を意識して聴いてみると、確かに8分休符があるお陰で8分音符が迫力あるように聴こえました。

女子学生6は、8分休符があることで、本当に迫力があると思ったし、緊張感も出ていると思った。

女子学生7は、ベートーヴェンの「運命」の第1楽章の冒頭のリズムはよく耳にすることはあるが、楽譜までは見たことがなかった。しかし、「運命」の冒頭に8分休符があることを初めて知り、また、その部分を意識して聴くことで、ベートーヴェンの作曲の偉大さを知るこ

女子学生8は、中学や高校の時にベートーヴェンの「運命」は部分的ではあるが、聴いたことがあります。本日も最初にその説明を聞いて、注意して聴いてみるとその通りだなと思いました。8分休符を使うことで俄然違ってくるのだなと新たに学ぶことができ、よかったと思います。



女子学生9は、耳で聴いた感じだと、頭に8分休符があるとは気付かない。ベートーヴェンは休符を入れて音に強弱をつけていてすごいと思った。指揮者を観ていたら休符が入っていることがよく分かった。

男子学生3は、ウツ、タタタ ターのウツ（8分休符）を入れたことで爆発的な迫力を出している。

男子学生4は、ウツ（8分休符）を入れたことでベートーヴェンが語った「運命はこのように扉を叩く」の動機がよく表現されているのが分かった。また、演奏者全員が8分休符を意識しているのが、聴いていてよく伝わってきた。

女子学生10は、ウツ、タタタ ターで強く弾いたりして、とても不気味な雰囲気が出ている。

女子学生11は、すごく表現の工夫がされている作品だと思う。ウツ、タタタ ターの部分はこの楽曲で最大限に強調しようとしているため、他の部分より特に工夫して創作されていると思う。この交響曲のテーマである。

女子学生12は、 | ♩ こうすれば間が抜けると考えたベートーヴェンは  のように考えた。8分休符を入れることで曲に迫力が出るとベートーヴェンは考えたのであろう。実際その部分は爆発したようで、極めて迫力のある演奏が可能である。

女子学生13は、「運命」を聴く前に先生が3連符で歌ってくださったお陰で、8分休符だと迫力があるのがすごく伝わってきました。特に低音とティンパニが不気味な雰囲気を出していて、より迫力を感じました。全体的に暗いメロディが多かったので、これからの運命への不安がとても上手く表現されているなと思いました。

女子学生14は、以前から「運命」を演奏する団体の指揮者は難しそうだなと思っていました。それが本日最初に8分休符があり、客からは指揮と演奏がずれて見えるので、大変そうに見えるのだと分かりました。

3. 交響曲第5番 ハ短調「運命」作品67 ルー トヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン全楽章の鑑賞

女子学生1は、2楽章の金管楽器が目立って出てくるところがとてもよい。高校の時吹奏楽部でありトランペット担当であったため、とても吹いてみたくなった。第3楽章がよかった。全楽章通して聴いたのは本日が初めてであった。ベートーヴェンの「運命」の偉大さにびっくりした。

女子学生15は、「運命」1曲に喜怒哀楽の4つを入れているところがすごい。音の大小がはっきりしていて耳に残る。小学生の頃にも聴いたことがある。楽器は沢山あるのに一つ一つの音が綺麗でまとまっていると感動した。演奏者は、指揮者も見えないといけないから大変だと思った。やさしい音はやさしくて聞きやすい。大小の区別があって聴き惚れる。「生で聴きたい」と思いました。楽団員の人と同じ動きをしているのはすごい。一人一人の動きを見ることが出来るのはDVDのよいところだと思った。朝比奈さんは90歳くらいであのような指揮をするのはすごい。

男子学生5は、指揮者は身体を使って表現していた。フルートもいて驚いた。演奏者も「溜め」の時には身体を使っていた。第2楽章を初めて聴いて、第1楽章と雰囲気が違うなと思った。私は指揮者を見ていて動きがよ

くわからないなあというところがあるが、演奏者はすごく指揮者をりかいているのだなあと思った。第3楽章では、不気味さが伝わってくるが、楽しさも伝わってくるように感じた。聞こえないくらい小さい部分もあったので注視して見ていると非常に小さい音で演奏していたので驚いた。ヴァイオリンの人たちの動きが皆同じなのにも驚いた。指揮者のまばたきの回数が多いし、また、はやかった。

男子学生1は、2楽章はとても穏やかであった。その中にも力強さがあってすごいと思った。強弱があって聴いていて飽きない曲であった。また、とても心地よい曲であった。

男子学生2は、音の強弱というのがよくわかりませんが、小さくなったり、大きくなったりして、聴く側の意識がすいこまれてるように感じました。

女子学生3は、私は、この曲が好きです。何故かと言うと、とてもテンポがとりやすく、迫力がある部分があれば、なめらかな部分もあって、聴いていて、次はどんな場面なのかななどと聴いていて、ハラハラドキドキして楽しいからです。

女子学生4は、ヴァイオリンが沢山いてビックリしました。初めのンジャジャジャ | ジャーンしか聴いたことがなかったので、後のメロディがとてもよかったです。主題再現部は、クラリネットやフルートがとても主張されている部分があるなと思いました。指揮者がオーバーな指揮をしているなとも感じました。この曲全部迫力があるのかなと思っていたのですが主題1とか2とかがゆっくりなメロディで聴きやすかったです。

女子学生16は、「運命」という曲はよく耳にすることがあります。でも、だいたい序盤のよく聴くところなので、今回のように全楽章聴いたことはありませんでした。すごくしなやかな感じになったり、不気味な感じになったり、この「運命」という曲を聴くだけで、いろいろな気持ちを捉えることができるなと思いました。全く聴いたことがない部分もあったのですが、少しは聴いたことがある部分がありました。指揮者の方の動きもとても独特でした。演奏している方々がちゃんと見ているかと気にして見ていました。でも、見ていない方が沢山おられたので、音にずれが生じるのかと思っていましたが、音は全くずれないのですごいなと思いました。

女子学生17は、第2楽章は第1楽章と反対に穏やかで明るいものでした。第4楽章もだんだん大きくなってドーンって感じの迫力ある明るいものでした。

男子学生6は、第2楽章はとても上品で勇ましかったり、眠りを誘うようだったり、とてもやさしいお金持ちの人を連想させるように感じました。この第2楽章が一番すきなのかも知れません。第3楽章は[A]が少し不気味でしたが、[B]が、まるで舞踏会のように華やかでした。第4楽章に入るといきなり大迫力で来ました。少し静かになったりの部分もあり音量の差が感じられ、とてもダイナミックさが感じられてよいです。

女子学生5は、第1主題と第2主題の雰囲気は全く異なっており、迫力のある第1楽章に比べて第2楽章はホルンの独奏で第1主題とは違う緊張感を感じた。第2楽章は緊張感漂う第1楽章から一転した。最初にヴィオラとチェロで穏やかな曲調で、私は「運命」を中学生の時に第1楽章までしか聴いたことがなかったので、雰囲気の変わりように驚いた。第3楽章はトリオ部分の速いリズムが本当に喜びながら踊っているようにきこえた。第4楽章との間に区切りはなく、そのまま第4楽章へ続いた。第4楽章は全合奏で力強い曲調であった。展開部で再び第3楽章の主題が組み込まれており、驚いた。

女子学生6は、第2楽章は雰囲気ががらりと変わって穏やかな感じで始まって、弦楽器と木管楽器が交互に出てきたりして、かわいらしいところもあった。第3楽章の始まりはさみしい感じで、ところどころ盛り上がってトリオの部分では、チェロとコントラバスが動いていて面白かった。第4楽章に入ると、だんだん盛り上がって盛大な感じで始まってカッコいいと思った。それからすごい有名な部分が出てきて、壮大な感じで、でも、すごく綺麗だと思った。表現の幅が凄い。

男子学生7は、最初に感じたことは、力強いなことでした。ところどころでは弱くなっていくところも好きです。そして、まただんだん力強くなっていくところも好きです。でも私は、このだんだんと強くなっていくところが一番心に残りました。

私は、楽器について殆ど知識がありませんが、フルートが演奏しているところはなんだかとても穏やかになりました。他にも優しく演奏しているところは何か感動しました。「運命」のところどころは聴いたことがあるよ

うな気がして、この曲は全部聴いてみたいなと思いました。私は、クラシックはあまり聴かないのでよくわかりませんが、クラシックは全部曲が長いのですか。演奏者は疲れないのかなあとと思います。今までのように曲の冒頭部のみ聴くのではなく、やはり曲は全部聴くのがよいと思います。私は「運命」を通して聴いてとてもリラックスできました。

女子学生7は、第2楽章は第1楽章と比べると穏やかであり、第1楽章での、シタタタ | ターという支配感を忘れさせるような曲想が印象に残った。第3楽章での2回目のスケルツォは第4楽章への雰囲気を変えながらの演奏が気に入った。そして第4楽章は、今までと違い、曲が終わりに近づけば近づくほど、壮大で力強く演奏されているのがとても印象的であった。ピッコロが高く鳴り響いているところはすごくよかった。本日全楽章通しで聴いてみて、新たな発見があった。個人的には第4楽章の構想も結構気に入っている。

女子学生8は、力強い演奏から始まって、静かな優しい音の演奏になったりで、沢山の楽器の音を楽しめるなと思いました。楽器一つ一つの音が綺麗に聞こえるのでよいと思います。私は、楽器一つ一つの名前や音などはあまりよく知らないし、わからないことだらけですが、聴いてこの楽器はこんな音が出るのだと改めて知ることができました。

男子学生8は、第2楽章のアンダンテ・コン・モートでは第3変奏の構成から楽器特有の音色を十分活かした演奏であった。第3楽章のアレグロでは、遅めのリズムから怖々しい雰囲気を漂わせながら明るくリズムを持つていくような楽章でした。第4楽章もアレグロで終盤にかけてとても長い演奏となり、全ての楽章を包み込んだような迫力のある曲だと感動させられました。

女子学生9は、第2楽章の初めは、チェロの低音だけで落ち着いた感じだった。第1楽章よりも落ち着いた感じであった。第1楽章よりも少し明るい音であった。最初は暗い感じでトリオから楽しい感じに変わった。第3楽章と第4楽章がつながっている感じになっていたから第4楽章に変わったことに気づけなかった。ヴァイオリンの弦を指ではじく動作がかっこよかった。ティンパニもかっこよかった。最初はとても暗い感じであったけれども、最後はとても明るい感じであった。

男子学生3は、指揮者の迫力が凄かった。指揮者は身体で「運命」を表現していた。この演奏の指揮者はまもなく90歳という人々であった。おそらく聴衆は指揮者が誰なのかで演奏会に足を運んでいるのだと思う。

女子学生18は、第2楽章の最初は少し静かでおとなしい感じであった。でも途中から激しくなってきた。主題展開部では暗めな感じであった。しかし、音量はだんだんと増してきた。再現部も静かに始まった。全体的にだんだん盛り上がるようである。

男子学生4は、第3楽章、第4楽章では、第1楽章よりも滑らかで、楽しそうな演奏であった。聴いている方もその世界に引きずり込まれる。また「運命」1曲で人のあらゆる感情を表現するのはすごいことであると思った。

男子学生9は、「運命」を通して聴くのは初めてであった。

女子学生11は、第2楽章では第1楽章とは違い、始まりはそこまで暗い雰囲気ではないが、曲の流れに抑揚があるなあと感じた。フルート、クラリネット、ファゴットの追いかかけのところが旋律がとても好きです。第3楽章は第2楽章の雰囲気をガラリと変えていました。出だしの音は勿論、演奏する楽器の違いだけでなく、第1楽章、第2楽章とはまた違った曲の雰囲気を創りだしている。

女子学生12は、ハ短調からハ長調になる。ハッピーエンドで終わった。初めて第2楽章を聴きましたが、理解できました。指揮者の動きに感動しました。曲を身体で表現していました。ガラッと曲の雰囲気が変わってゆったりとした穏やかな時間を過ごしている感じでした。途中のヴァイオリンのリズムが好きでした。クラリネットとフルートの音が素敵でした。[B] トリオの主題の部分素敵なリズムと音色だと思いました。第4楽章はいきなり曲調が明るくなり、どん底で何もする気が起きなかったのに、綺麗な花畑を見つけて、はしゃいで踊り出す感じがしました。ピッコロの高音がところどころに入っていてとてもよいアクセントになっていました。曲の速度が速くなったところ、おーっ!! っとなりました。

女子学生13は、第2楽章で、全体的にある穏やかなメロディの途中で力強いメロディもあり、第1楽章の雰囲気が感じられず、違いがすごいと思います。穏やかなメ

ロディでは、明るい「運命」を、力強いメロディでは、どんな「運命」にも立ち向かう勇気を表しているのかなと思いました。第3楽章では冒頭でまた暗いメロディが出てきたけれど第1楽章とは違う雰囲気だったので、また、違う不安を感じました。後半はメロディは静かであったけれど、この先の「運命」が見えない様子が伝わってきた。第4楽章では、ピッコロ、コントラファゴット、トロンボーンが加わったことにより、音により力強さを感じました。また、音に力強さが増したことにより、「運命」に立ち向かう勇気もより強くなったように感じました。

男子学生10は、第2楽章はとても静かで、途中でグワッと大きな波が来たりしていた。指揮者は手や目で合図を送っていて演奏者と絶妙なコミュニケーションを交わしているのが見ていてわかる。第3楽章アレグロB トリオの主題は個人的に一番好きかもしれない。第4楽章に入ってから大きな音が出だした。とても退屈しないメロディだ。「運命」ってこんな感じなのだ初めて理解しました。終わり方がとてもよい。

女子学生19は、第2楽章は変イ長調に変わり、曲調もだいぶ明るくなった気がする。音の強弱が凄すぎる。ところどころ第3楽章と似ているところはあるけれど初めて聴いたから「運命」という感じがしなかった。第3楽章は第1楽章と同じハ短調。トリオの部分では、舞踏会まではいかなければでもダンスのイメージが強い。聞こえるか聞こえないかくらいの大きさと弦楽器を弾けるのはすごいと感動した。あれだけそろえるのは本当に難しいと思う。

4. 指揮者が代わると曲が変わる

—交響曲第5番 ハ短調「運命」作品67

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン—

指揮者が朝比奈隆⁴⁾ からマークス・ポシュナー⁵⁾ に代わった。オーケストラも大阪フィルハーモニー交響楽団から広島交響楽団⁶⁾ に代わった。

女子学生1は、若い指揮者（マークス・ポシュナー）の演奏の方がかっこよく聞こえた。奏者の楽器の鳴り方も違って聞こえた。朝比奈隆より演奏速度がとても速かった。でも、聴いていて気持ちがよかった。個人的に

は好きです。この芸術の授業はとても楽しみです。

女子学生2は、若い指揮者（マークス・ポシュナー）の演奏の方が速かった。加えて、メリハリがしっかりしていた。ヴァイオリンパートの鳴りがとてもよかった。管楽器は逆に穏やかな部分を出していたと思う。指揮者が代わっただけで同じ曲であるのに雰囲気が違う。楽曲を解釈しているのは指揮者なのだ。強弱のつけかたも指揮者により変わってくる。今まで知らなかったことをこの授業で知った。

女子学生15は、朝比奈隆よりマークス・ポシュナーの動作の方が大きく私はこちらの方が好きです。マークス・ポシュナーの演奏の方が元気です。身体全体で指揮しているので見ていて楽しいです。マークス・ポシュナーの指揮を実際自分の目で見てみたいです。オーケストラの指揮者はすごいなと思いました。

男子学生5は、指揮者が代わると演奏も変わるのだなと思いました。朝比奈隆とマークス・ポシュナーの動きは違う。でも、最初の部分ンダダダ|ダーのところはよく似ていた。コントラバスの人が身体を左右に揺らしながら演奏していた。ティンパニで緊張感が伝わったり、楽しさが伝わってきたりしているんじゃないかなと思いました。第2楽章ではすごくみんな動きが滑らかになっている。朝比奈隆よりマークス・ポシュナーの方が身体をよく使って表現しているように思った。指揮者がすごく楽しそうにしているように見えた。

男子学生1は、二人目の指揮者（マークス・ポシュナー）の方が随分とアップテンポで面白いなと思いました。また、指揮ぶりは指揮者によって全く違うということがわかりました。マークス・ポシュナーはとても楽しそうに指揮をしているなと思いました。マークス・ポシュナーの演奏はとても気持ちがよくて、朝聴きたいなと思いました。指揮者の動きがとても滑らかな時は、演奏もとても滑らかなんだなと思いました。個人的にはトランペットの音色が好きです。

男子学生2は、朝比奈隆に比べるとマークス・ポシュナーの方が迫力があるなあとと思いました。何だか力強く同じ曲でも指揮者が違うとこんなにも違うのかと驚きました。確かに速いなと思いました。

女子学生3は、マークス・ポシュナーの演奏はアップテンポで聴きやすかったです。感情がものすごくこもっ

ている指揮だなと思いました。また、この演奏は楽団員全員気持ちが一つにならないとできないだろうと思いました。

女子学生4は、マークス・ポシュナーの指揮する「運命」と朝比奈隆の指揮する「運命」は同じ「運命」なのに感じが違った。若いマークス・ポシュナーの方が迫力があり、強弱の付け方もオーバーだ。また、朝比奈隆の表情は暗く、マークス・ポシュナーの方は明るく笑顔で指揮をしていた。私はマークス・ポシュナーの指揮の方が好きだ。

女子学生16は、マークス・ポシュナーの広島交響楽団の「運命」はテンポがすごく速い感じがする。大フィルの演奏したのもベートーヴェンの「運命」なのだが、同じ曲を演奏しているとは思えなく、違う曲を演奏しているのではないかなとも思えた。勢いのあるところはすごく迫力があって、静かなところはともしなやかに感じます。指揮者が違うだけで、こんなにも曲が変わってしまうのかと思いました。

女子学生17は、指揮者により同じ曲でも雰囲気が変わってくるんだなと感じました。マークス・ポシュナーが指揮すると楽団員の音はよくそろって響いて、迫力がすごいなと思いました。第2楽章はなめらかで綺麗な演奏でした。ヴァイオリン、ヴィオラの音とも綺麗でした。ティンパニはよく響いていてさらなる迫力を感じました。途中、フルートやピッコロのようなはねている感じのところがありません。滑らかだったり、はねたりだったり楽しい曲だなと思いました。コントラバスとヴァイオリンのンダダダ|ダーン の感じのところが面白かったです。

男子学生6は、指揮者が代わるとここまで変わるのかと思いました。朝比奈隆は上品で、滑らかでしたが、マークス・ポシュナーはすこしとがって聞こえます。DVDを観ていて気付いたのですが、指揮者は手の動き、身体の動きだけでなく、顔の表情でも、演奏者達に訴えていることに気付きました。

女子学生5は、マークス・ポシュナーの「運命」の方が朝比奈隆の「運命」よりも速く感じた。指揮者が違うだけで同じ曲なのに雰囲気が全く異なるものになっていて感動した。マークス・ポシュナーは本当に楽しそうに指揮をする人だなあと考えた。

女子学生6は、マーカス・ポシュナーの演奏は朝比奈隆の演奏より速いから、軽い感じがしたし、すごく勢いがあった。同じ「運命」なのに雰囲気は全く違って、違う曲みたいに聞こえる。私は、マーカス・ポシュナーの「運命」の方が聴きやすく好きだ。また、マーカス・ポシュナーの演奏の方が音量とか表現の仕方の幅が本当に広くて、細かくて凄いと思った。とにかく指揮者によりこんなにも曲の雰囲気が変わってしまうのかとびっくりした。

男子学生7は、指揮者は若くしてもなれるのだと思いました。才能があればなれるのだとわかりました。よくテレビドラマで指揮者の役を演じている俳優がいますが、指揮者を演じることは非常に難かしいんだということがわかりました。

女子学生7は、同じ曲でも指揮者によって表現が違うので聴いていてとても面白かった。特に出だしは、マーカス・ポシュナーの方がより鮮明に聞こえた。また、マーカス・ポシュナーの指揮は朝比奈隆の指揮より速かったのでスピード感を感じた。マーカス・ポシュナーの指揮ぶりは表情豊かであった。また、フォルティッシモでも楽譜上は全く同じことが演奏上では全く異なってくるので大変に感動した。マーカス・ポシュナーは顔の表情をとてもよく利用していた。映像でみてもとても表情豊かだったので、曲を聴いていてもやはりそれが影響されているようでとてもよかった。同じ曲でも指揮者の違いで聞こえ方が変わってくるのでまた聴いてみたいと思いました。

女子学生8は、51ベートーヴェンの「運命」は指揮者が代わると別のものになってしまったように感じます。マーカス・ポシュナーと朝比奈隆では迫力も速さも違います。指揮者が代わるだけでこんなにも違いが出るのだと学び、このような感じで変化するのもいいなあと考えた。朝比奈隆よりもマーカス・ポシュナーの方が動作がとても大きいことに気がきました。あれは音の強弱で違うのでしょうか、指揮者の元気による違いなのでしょうか。二人の指揮者ともとても表情豊かなので音楽が好きなことがよく伝わってきます。

男子学生8は、マーカス・ポシュナーは若い指揮者であった。朝比奈隆は90歳が近いなと思いました。やはり若い指揮者は、曲のキレが違うなと思いました。あまり

クラシックに接したことのない自分にもわかりました。個人的に言うと、マーカス・ポシュナーの「運命」に感動しました。

女子学生9は、朝比奈隆の演奏はのっぺりしていたけれどもマーカス・ポシュナーの演奏は目まぐるしいほど迫力があった。

男子学生3は、フルートの人が身体全体を使って演奏していた。指揮者は楽団員一人一人の目を見ながら指揮をしていた。楽団員の人は皆曲の感情を身体や目で表現している。指揮者は笑顔でのびのびと曲を表現している。小刻みに身体を動かしている団員が多かった。また、指揮者はいろんな表情をしていた。指揮者が誰になるのかは重要なことと知った。

女子学生17は、マーカス・ポシュナーの「運命」は速くてビックリした。ゆっくりしたところも速くて落ち着かないように感じた。指揮者が代わるとこんなにも変わるのかと大変にビックリした。速すぎてヴァイオリンの人なんかフルート捲りが間に合うのだろうか心配になった。

男子学生9は、マーカス・ポシュナーの「運命」の方が好きです。迫力とスピードが違っていると感じました。

女子学生13は、同じ曲でも指揮者が違うと受ける印象は全く違います。

男子学生10は、指揮者が違うだけで曲が全く違う。テンポが前の指揮者と違う後の指揮者の方が迫力があって、自分はこちらの方が好きです。

女子学生19は、マーカス・ポシュナーは朝比奈隆より倍のスピードで指揮しているように思えてビックリしました。ヴァイオリンを演奏している人はよく指があんなにも動くなあ。指揮者の手がしなやかで何かととても綺麗だなあ。しかし、私は、速くても感動はするけれど朝比奈隆の指揮ぶりが好きかもしれない。ゆっくりの方が一音一音聴き取りやすい。興味をもったことは、指揮者が左利きの場合、指揮棒はどちらの手に持つのだろうかということです。左利きの指揮者がいたら観てみたいと思いました。

注

- 1) 改訂 標準音楽辞典アーテ KK音楽之友社 (1991)

p. 455

- 2) 音楽大事典 第2巻 平凡社（1982）p. 646 ～ 647
- 3) Victor VIBS-10044/VIVS-169
- 4) 演奏時間：38分14秒
- 5) 演奏時間：32分21秒
- 6) 交響曲第5番 ハ短調「運命」作品67ベートーヴェン作曲（指揮：マーカス・ボシュナー 演奏：広島交響楽団 NHK-TV放映：2009. 2. 28）

